

かもしか

待 喪 夕
 子 明 夕
 し 中 の 夕
 る の 夕
 葉 馬 木
 成



第二回国民文化祭・川柳部門作品募集

- ▽作品 未発表作品に限る
- ▽題と選者 各題1句
- 「火」 吉岡 龍城
- 「笑顔」 森中 恵美子
- 「住む」 尾花 白風
- 「本(ほん)」 藤田 きよし
- 「雑詠」 堀口 北斗
- ▽応募料 千円 郵便小為替と作問封
- ▽用紙 6cm×18cmの白紙に各題1句連
- 記。無記名。封筒に住所・氏名
- ▽宛先 862熊本市大江2-7-11(財)
- 熊本県立劇場内 第二回国民文
- 化祭川柳部門事務局
- ▽締切 七月三十一日消印
- ▽賞 文部大臣賞 知事賞ほか
- 第二回国民文化祭・熊本文芸大会
- ▽とき 十月三日(火) 午後一時半
- ▽会場 菊池市文化会館(熊本県)
- ▽講演 駒田 信二
- 主催 第二回国民文化祭
- 熊本文芸大会実行委員会

第四十一回青森県川柳大会あんない

- ▽とき 九月六日(日) 午前十時より
- ▽会場 東奥日報社四階ホール(青森市)
- ▽会費 二〇〇〇円(記念品・昼食)
- ▽特別選 「船」二句 西尾 菜選
- (「川柳塔」理事長)
- ・ハガキ大用紙に楷書「船」二句と住所
- 姓号、懇親会への出欠を明記、会費を
- 必ず添えて、青森市新町二丁目二
- 十一東奥日報社事業部「県川柳大会」
- 係あて八月八日必着でお送りください
- ▽宿題と選者(当日持ち込み)各1句
- 「睦方(あけがた)の雨」西谷みさを
- 「沼」宮本紗光「無条件」中林瞭象
- 「社交辞令」村井吉重「力」工藤甲吉
- 「餌」西山金悦「削る」長沢天僧
- ▽席題と選者 当日3題出題 各2句
- 森越剣児楼 三浦宗一 上野しん一
- 杉野草兵 工藤寿久 長谷川愛子
- ▽賞 出席者を対象に県知事賞ほか
- ▽懇親会 会費一〇〇〇円
- 主催 東奥日報社

七月号もくじ

第五回川柳Z賞作品特集	
大賞	海地 大破 二
選評	柴田 午朗 一一
選評	時実 新子 一二
選評	細川 不凍 一三
選評	山村 祐 一四
選評	寺尾 俊平 一五
選評	杉野 草兵 一五
選評	橋高 薫風 一六
選評	大野 風柳 一七
選評	尾藤 三柳 一八
選評	片柳 哲郎 一九
選評	相馬 銀波 二一
北の角笛	かもしか集(210) 二二
蒼玉抄(169)	蒼玉抄(170) 二七
蒼玉抄(170)	蒼玉抄(170) 三七
野沢省悟氏への答礼	佐藤 岳俊 三一
一葉集	柏葉みのる 三四
花つれづれに	吉田 州花 二一
スクリーン	万 迷多 二九
コーヒーション	コップ⑧ 松山 我楽 三〇
柏亭独語	柏葉みのる 表三
カッタ	太田 正末

第五回川柳Z賞 海地大破さん(土佐)大賞に輝く

—第一次選考—

- ☆宮本 紗光 すいせん
- ・工藤 寿久・原 多佳子・林 瑞枝
- ・桐越 千絵・加藤かずこ・嘉瀬信柳詩
- ・海地 大破・三浦 玲子・吉田 州花
- ・神谷三八朗・山本 桜子
- ☆柏葉 みのる すいせん
- ・海地 大破・猪狩 牧芳・桐越 千絵
- ・武村 一美・斉藤はる香・野沢 省悟
- ・吉田 州花・十橋はるお・佐藤 岳俊
- ・佐野 栄二
- ☆小野 公樹 すいせん
- ・神谷三八朗・小島 悦生・浜本 美茶
- ・岩崎真里子・藤川 良子・海地 大破
- ・工藤 寿久・情野 千里・宮本めぐみ
- ・森崎 大青
- ☆西山 金悦 すいせん
- ・佐藤 岳俊・吉田 州花・神谷三八朗
- ・末松仙太郎・岩崎真里子・田沢 恒坊

—第二次選考—

- ・嘉瀬信柳詩・樋口 仁・小山田 緑
- ・松村 育子
- ☆工藤 寿久 すいせん
- ・海地 大破・野沢 省悟・吉田 浪
- ・武村 一美・岩崎真里子・樋口 仁
- ・長町 一吠・中原 諷人・玉木 柳子
- ・三浦 玲子
- ☆高田 寄生木 すいせん
- ・行本みなみ・西条 真紀・佐藤 幸子
- ・北村 泰章・山本忠次郎・菊池俊太郎
- ・桑野 晶子・金山 英子・雲石 隆子
- ・石川 重尾
- 第二次選考—
- ★柴田 午朗 すいせん
- ①金山 英子③海地 大破⑤石川 重尾
- ②佐藤 岳俊④樋口 仁
- ★時実 新子 すいせん
- ①西条 真紀③藤川 良子⑤工藤 寿久
- ②神谷三八朗④中原 諷人

★細川 不凍 すいせん

- ①野沢 省悟③金山 英子⑤岩崎真里子
- ②桑野 晶子④長町 一吠
- ★山村 祐 すいせん
- ①岩崎真里子③玉木 柳子⑤菊池俊太郎
- ②浜本 美茶④野沢 省悟
- ★寺尾 俊平 すいせん
- ①海地 大破③藤川 良子⑤山本忠次郎
- ②佐藤 岳俊④西条 真紀
- ★橋高 薫風 すいせん
- ①行本みなみ③藤川 良子⑤林 瑞枝
- ②浜本 美茶④原 多佳子
- ★大野 風柳 すいせん
- ①小島 悦生③工藤 寿久⑤山本忠次郎
- ②嘉瀬信柳詩④桑野 晶子
- ★尾藤 三柳 すいせん
- ①原 多佳子③野沢 省悟⑤樋口 仁
- ②菊池俊太郎④海地 大破
- ★片柳 哲郎 すいせん
- ①西条 真紀③桑野 晶子⑤海地 大破
- ②武村 一美④金山 英子
- ★杉野 草兵 すいせん
- ①工藤 寿久③加藤かずこ⑤吉田 州花
- ②海地 大破④桐越 千絵

第五回川柳Z賞・大賞

(賞金十万円・句集・津軽塗楯)

土佐市 海地大破

大鼓打つ血の繋がりを意識して
 箸を作らんと一本の樹を削る
 約束をふと思ひ出す豆の花
 一椀の重さに負けて父の旅
 旅人の前を歩いてゆく仏
 さびしくて海岸線をひた走る
 盃は母を想ったことがある
 この指止まれ小さな町を触れ歩く
 てのひらの白さを知っている家族
 八月の怒りで魚の内臓を抜く
 糸屑をとるのはきつと仏の手
 言い訳は明るいうちにしておこう
 冬の絵を抜け出す姉を呼び止める
 次々と鴉が墜ちる父の部屋
 真夜中の影が動いて犬になる

はめ絵からこぼれていった母の町
 大根の切り口にあるうらみごと
 憎しみが育つ影絵の中の犬
 神経科から帰ってこない十指たち
 夕焼けを一緒にしまっ帽子箱
 母よりもさびしい人に鶴を折る
 後姿は誰にでもある遠い海
 はらわたに男は冬の絵を残す
 人間を許そうとせぬ最後の木
 誰かが死んで誰かが育つ猫の腕
 思い残して仏は軒を出たがらぬ
 しりとりは続きは墓の下でする
 亡父の鍵ちちのかたちで 置いてある
 臨終はきのうで燕巣をつくる
 父の肋を集めて筏組み立てる

- 選考のあとに
- 大賞 16点 海地大破(高知)
 - 準賞 14点 西条真紀(岡山)
 - 秀逸 11点 金山英子(兵庫)
 - 秀逸 11点 野沢省悟(青森)
 - 秀逸 10点 工藤寿久(青森)
 - 佳作 9点 桑野晶子(北海道)
 - 佳作 9点 藤川良子(岡山)
 - 佳作 8点 浜本美茶(北海道)
 - 佳作 8点 原多佳子(静岡)
 - 佳作 8点 佐藤岳俊(岩手)
 - 佳作 7点 岩崎真里子(青森)
 - 佳作 6点 小島悦生(愛知)
 - 佳作 6点 行本みなみ(岡山)
 - 佳作 5点 菊池俊太郎(東京)
 - 佳作 4点 嘉瀬信柳詩(北海道)
 - 佳作 4点 武村一美(岡山)
 - 佳作 4点 神谷三八朗(愛知)
 - 佳作 3点 玉木柳子(福島)
 - 佳作 3点 樋口仁(愛知)
 - 佳作 3点 加藤かずこ(北海道)
 - 佳作 2点 中原諷人(鳥取)
 - 佳作 2点 山本忠次郎(東京)
 - 佳作 2点 長町一吠(岡山)

第五回川柳Z賞・準賞

(賞金一万円)

岡山市 西条真紀

生きてありたし雑木林のこぼれ陽に
 いのちこそ わが錠剤のおびただし
 仏野彷徨うわが掌のひらのうすかりき
 寂光のうす陽に透けしわが阿修羅
 阿修羅の息 すすきえにしを祈り継ぐ
 まぼろしの駅は来世かきさらさら
 終の旅もどらぬ刻を埋めゆるか
 わが死さま伝えよ風の法連華
 千丈を越えてわが声沙汰がなし
 ひらかない指のまことぞ裸木ぞ
 ねむりぐすりが効かない寒いくちびるに
 祈らばや わが胸中の沼にごる
 果て易き軽きいのちぞ げに寒し
 遠雷や子ばなれできぬふたぢぶさ
 冬帽子母になりきること重し

失ないしものなき双手寒かろう
 ジャズ寒しタンゴも寒し人の群
 みずえのぐいまだひとつの影 淡し
 眠らねば夢に逢いたき人等待つ
 子離れぞ うすらみどりはまみどりに
 風よかせ逢わねば漢が嗚呼と哭く
 だから抱き合おう別れるまでを抱き合おうや
 みちづれのわれも泣き虫石積まむ
 めぐる季に淡いのちは吐きつくす
 やがて雪 花野千里を訪ね来よ
 あかつきに遊ばす終のこもこもを
 残されたいのちを見つむ花の影
 掌を抜けた毬の行方よ終のこと
 わが道は定まりたりし 雪の傘
 欠け壺や 花野はいまも遠きまま

- 佳作 2点 桐越千絵(北海道)
- 佳作 1点 石川重尾(静岡)
- 佳作 1点 林瑞枝(鳥取)
- 佳作 1点 吉田州花(青森)

- ・全国から多数のご参加をいただきましてありがとうございます。また、募集要項をご紹介くださった各誌紙のご厚意に心よりお礼を申し上げます。
- ・選考委員の方々は、優秀作家を掘り出すという心身の苦業の中から、前記のように選出していただきました。ほんとうにありがとうございます。
- ・第一回以来、準賞連続四回受賞の海地大破さんが今願の受賞をされました。おめでとございます。
- ・第一次選考は、事務局のある青森県下の六人で担当しておりますが、第八回から、青森県外からの四人を加えて十人で選考に当ることになりました。
- ・出句専用紙を作りましたので、出句される方は、返信用封筒を封入してお申し込みください。
- ・第八回も多数の方の挑戦を祈ります。

秀逸

神戸市 金山英子

火口火遊び売りにゆくのは私の子
 満月や清め塩して子を戻す
 雪ははらはら はらはらと我子なり
 おまえててなし藪坊主とや冬の天
 あやとりの子とは狂いの血をわかた
 賽の河原の子が置き忘れたは片耳か
 傘はくるりと憎み返して母なる血
 葬送や母にあふれる槐ささす
 母の帯くるりくるりと気ままに解け
 有縁無縁の母といくにち 雪といくにち
 慟哭の母はくるりと片乳房
 背に肩にやがて乳房にぬくもる雪
 まあたらしきは絵馬に描れし冬乳房
 纏尻に姉を愛した歳月を
 不意に晴天 妹きらい姉きらい
 娼婦足を素足は裂けよ川上に
 梅は早咲き 欠歯欠櫛ポロポロ素足
 この指を離れてゆくは他人の子
 相对死の相手と過す晴大雨天
 とまじときは娼婦がこぼす娼婦の唄

秀逸

青森市 野沢省悟

火の芯を幾度わが瞳は凍てらせた
 わが遺書として桜桃を一個掌に
 にんじんの種ばかり蒔く爪立てて
 たましいを突如抱かれた目割菜
 洗いざらしの下着が似合う鳥賊の骨
 わが顔が映るみそ汁 難破船
 葉桜を一枚かじる青い父
 眠れ子よ 父は一個の波紋たり
 火山湖の碧よ忘却夫婦かな
 ある日極道いちにち人を憎むを止め
 わが疼痛としての堂を掌に包む
 曇天をいちにちいっばい空宙につめる
 天の河 傷乾ぐごと田螺たり
 自我像の喉はやさしく細く描く
 靴下を塔婆の如く脱ぎ捨て
 獣皮かも知れぬ下着を陽に晒す
 梅十し一個わが色欲の如く在り
 妻のうなじに忽然と咲く水の駅
 夕焼けを一碗ほつれた掌にもらう
 眼が透きとおるまで秋風に身を晒す

秀逸

弘前市 工藤寿久

芦野茫 ちちもろともに坐り込む
 乳房持つ銀杏の下は去り難し
 童子の咳低く聞えて佇ち止まる
 地唄舞 喉まで雪を詰まらせて
 胎動も逆さ児なるや目刺し吊る
 干し菜汁ははが必ず降りてくる
 雪催い ことは先ず冷ゆ茄子の馬
 ちちははと同じ病に臥すは刑
 風が息喚る刻 子と毬を撞く
 生き過ぎて眼裏にある火の記憶
 握力を確かめてから街へ出る
 風倒木 血の繋りを嘔みころす
 神さまを袴ぎ花屋の前へ出る
 病む母の十間へ転がす頬袋
 貧しくて百樹に吊りし百の縄
 さんさ雪 柩に重し未完の絵
 雪掘れば土 土掘れば焚火跡
 義肢にも触れる痛さに耐えておる
 抱き癖のついた影絵と花を視る
 補聴器を外すと寒月だけ訝える

佳作 札幌市 桑野 晶子

オホーツクも妹も晴れ魚影たち
 雪有情絹のことばを転がして
 粉ふき芋の湯気如月のボヘミアン
 雪の助を行ったり来たり古墳村
 泥棒日記の素足あたりを登ってみる
 蟹売りの蟹ら阿修羅の眼を植えて
 口紅を一本買った直訴状
 雪もよい七つ道具のあたりに
 どじょっこふなっこ運命線もなじんでくる

佳作 旭川市 浜本 美茶

一族の血のあかるさやさくらんぼ
 水はじくレタスさわさわ明るい死
 ひとり羽化わかれの水は汲みませぬ
 黄色い手袋が咲く芒原
 冬のステレオゆっくりと吐く答
 欲情のかたち人間の樹が茂る
 接続詞ふゆの女の聞き上手
 処女受胎つるりとむける茹玉子
 生き肌の哀しみ洗ってもあらっても

佳作 岩手県 佐藤 岳俊

薪割れて白い年輪ゆきおんな
 ひび割れた手にも満ちてる冬の水
 薬叩き叩き足もとから仮眠
 目を開けて精霊の舞う闇の雪
 凶作の薬にも瘦せた息ひとつ
 足跡も地吹雪に消え北の葬
 鎌折れてどんどん冬の田がつづき
 子を産んで祖国ともいう泥田螺
 雪目までゆっくりとかす冬の月

佳作 岡山市 藤川 良子

黄昏の萩がひりひり咲いている
 ここはどこ彼岸か此岸か曼珠沙華
 そして秋ノラにもならずさんま焼く
 たましいも魚も溺れることがある
 気まぐれで人より深い穴を掘る
 哀歓の中でえにしの手糸たる
 逝く枕生きる枕も蕎麦まぐら
 哀しくていま哀しくて歯を磨く
 旅も束の間 生も束の間 萩こぼる

佳作 静岡市 原 多佳子

木枯しの中で蒐めるわたしの骨
 風葬の絵に一本の筆を画く
 目の前でわたしが不意に居なくなる
 遺言にうがい葉が置いてある
 かくれ家を文管の中に置いて妻
 着せ替えのとっても下手な人形師
 三つ指の髪で太らずブルータス
 泥沼の骨が一本曲らない
 落しを男の背なに見つけ出す

佳作 黒石市 岩崎真里子

デザートにほどよい悪が欲しくなる
 言うまいと思う石あり 喉仏
 五本ずつ束ねた嘘の無限大
 こんこんと湧き出る怒り 菜を刻む
 風が逝く ふたつみつつの風産んで
 鐘が鳴る 右に左に揺れながら
 鬼の子を産むのは止そう 冬が来る
 笑おうか 迷ってばかり指あそび
 出し入れの楽なところに出刃がある

佳作 名古屋市 小島 悦生

ハモニカの音痴なうちは許せよう
切花の切口にある身だしなみ
兵衛横む貨車が春野を歪にする
花びらに罪ある如く来る来ない
多数決とは策のない処刑だな
旅おわる日の針葉樹植えてある
攻め落とす城が美しすぎないか
春潮よめざめの歌を歌うべし
ホットドックの冷えも他人の街である

佳作 岡山市 行本みなみ

然るべき顔で一本の葦が死ぬ
陽炎に入り重くなる下半身
音楽に漂う姉の骨さがす
筈のない夜の鴉が夜を啼く
軋々の底 子を焚いた香が残る
胎内を轟々と墜つ蝶の声
春終る 少女は円を描き直す
お囃しが変わり極が担がれる
鏡から抜けでては売る 生年月日

佳作 東京都 菊地俊太郎

行き止まりの廊下の先を見ようとする
コルタールが背にはね返る旅の続き
水滴の形に乾く過去の景
鮎を切るハサミの他に何もなし
誰がための広場に敷いてあるマット
自動ドアの向うの魚たちの悲鳴
笑いこぼる席がある滝の裏側
わたくしにこだわるわたくしの手足
ふところの黒い茶碗は捨て切れぬ

佳作 札幌市 嘉瀬信柳詩

丁寧に墓掘る妻 まけたと思っ
世渡りが下手でマツチを全部擦る
酒のみ飽きた 犬を捨てにゆく
極打つ音から雪となってくる
すこし泣いてゆるんだねじを締め直す
追風のなかで素直になつてくる
ポチが死ぬ また定食の値が上がる
日葉さし父の歩みや亀の歩みや
木馬磨く父の一寸を笑うまい

佳作 岡山県 武村 一美

雪登帯の長さを何としよう
風も炎も禱りも抱いている乳房
くちびるに罪の一つは亨けんかな
燎原の火に生きそびれ死にそびれ
致死量も頒けあうほどの絆にて
みぞおちと同じいたみの皿を割る
相剋がつづく白夜がまだ続く
刃こぼれとためらい傷の数が合う
冬涛やたましいが病む月が病む

佳作 名古屋市 神谷三八朗

黒点のあり 瘦身の兄雨に病む
少年風を駆けて 枕木に追従す
他の一匹は見事に逃げた藁の馬
寝耳に水 耳をおおえばおんぼろで
泣けばすむ枝葉の枯れた話など
朝は 土瓶の口からの讃美歌
拜啓 頓首絶縁状とはちと違つ
次のゴミの日に出す一枚のハガキ
風と渡り入合う少し弛めの女下駄

佳作 郡山市 玉木 柳子

疎まれているから毛虫になつてやる
白という彩を最も恐がりぬ
敵かに夕陽に抱かれて死ぬつもり
ぼろぼろと涙を数えてから許す
生煮えの影を枯野に捨ててくる
こんな手もあるさ尻尾を振つてやる
遠回りしたのにここにも鬼がいる
嬉しくて鬼にも電話してしまふ
それが母にはあったと母に香を焚く

佳作 札幌市 加藤かずこ

絵本からかすかに洩れる水の音
一匹の虫よゆらめく長い午後
鈍色の街で忘れた絵を探す
小指の疼きよ他人の絵を盗む
ぬくもりに負けて愚かな猫になる
菌型あるりんご煮つめる深鍋へ
契りから絡らまる白蛇捨て切れず
赦されぬ葡萄ひとつを壘詰めに
毒薬と蜜の真ん中鮎を飼う

佳作 東京都 山本忠次郎

祝ぎごとに蟹をいじめる枯木立
願いがあってじっとしている土鈴
水の中にどんどん溶けていく言葉
きつと迎えに来てくれる紫の馬
雪の隠蔽力を信じてる首
石の話をしたかった蝸牛
怖い怖いと土の堅さが変わる
記号がいっぱいで風がいつもある街
彫刻の森の鬱血した魚たち

佳作 四日市市 樋口 仁

題の無い絵を描く川に急かされて
転落の耳を一枚買わされる
一幕の喜劇につかう泥の舟
空砲を撃つて父権を確かめる
屑みかんとうとう海を見ぬままに
危な絵の前へ時々くる夫婦
ビタミン剤と少し沖まで漕いでいく
爪を切る音を聞かれたかも知れぬ
翔ばぬ日のハンガーに吊る暗い羽根

佳作 鳥取県 中原 諷人

ひとの和の中で産湯の心地よし
生いたちの記から水しづきがある
夢百夜あやして詰める母の籠
海に抱かれて海のぬくもり父はじし
しつけ糸いくたび母として迷い
肋骨の一本さらけ花いちもんめ
靴が鳴る 答答辞のあとの出発に
雨のなか不意に駆け出た椅子ぐるま
ゆめ追って磁石をかきすサクランボ

佳作 岡山市 長町 一吠

右にゆこうか左へ行こうか道祖神
生きべた死にべた巡礼唄が通り過ぐ
切腹は明日にのぼす臙夜にて
思いかえせばいくたび数ゆ命乞い
恥の木をおろおろと降り月蝕す
春雷や幾多の恥を野に晒す
天に唾地に唾イワンの馬塵より馬鹿
凌いで生きる腕も吾もぼろぼろ欠け
哀しければ鞭のひとふり多くせよ

佳作 北海道 桐越 千絵

赤い鼻緒白い想いをかきたてる
父狂うときどき澄んだ水を汲む
青りんご 伽藍の母に手紙書く
絵を裂いて仏に詫びる絵ローソク
めしを盛る 塔になれない器にも
味噌汁に花の戒名浮いてくる
致死量にとおい林檎を丸齧り
祭り去って牡丹ひとひら生欠伸
小便小僧に逢いたくなつた坂の毬

佳作 静岡市 石川 重尾

にんげんが好きで風船ふくらます
予期した通り妻と貧乏しています
花はいけにえ人もいけにえ鶴を折る
まだ馬鹿を演じきれないチンドン屋
犬の眼の冬と向き合う旅の果て
妻の視野から雪降り雪の深さなど
飢えは転がり毬は小さな穴に陥ち
螺線階段ゆっくり降りるにんげんになる
鈴を鳴らしてじりじり貧乏症になる

佳作 米子市 林 瑞枝

一本の葉から産まれ出たふたり
遠景に首吊りがある核さわぎ
父よ父よと枕に埋める福音書
人形の腕がごろんと愛の果て
ワープロでホヘトの文字を撰って躁
挿鉢を上がるいち面花はだけ
一冊のシナリオ抜けて船が出る
嘘ひとつ礫のように胃に落ちる
花冷えや 乳房の痛む紐がある

佳作 青森市 吉田 州花

ふきのとう 逢うためだけにあった冬
風百態 心百態 まして恋
風孕む乳房が見たは冬の虹
曖昧な命重ねてスパイスを切らず
だまし船 ことば紡ぎのいとやすき
炎の色が変わるあとさきボタンかけ違つ
返書待せずに 積雪はゼロ
目になれ 企みばかりひびく耳
つたえてよ蝶 夏至は過ぎたと

第一次選考

通過作品五句抄

・30句より ・佳作以上は除きます

猪狩 牧芳 (郡山市)

前列のまん中に居る猫の皮
人嫌い瞳不逞な深海魚
卵塔場まで縮尺で下見する
助走なしで男が翔んで骨になる
上面の時間だけ食う水すまし

小山田 緑 (札幌市)

微罪重ねた刻も日は昇り
柩までおとごころしの笛を吹く
塩壺の底を極めた父の遺書
枕木となつて償う傷いくつ
頂点へさらす男の向う傷

北村 泰章 (高知市)

春つらら みな人間の貌となる
花束を抱く いちにちを大切に
素足になると人間が好きになる
情け深くて母の鼻緒はすぐ切れる
何もかも赦してしまふ木守栴

佐野 栄二 (袋井市)

ふり出しに戻って妻の手を引こう
夫婦って愛の化石たかも知れぬ
お隣りと言つ語を探がす冬の街
這い這いをしながら拾う智恵の種
騒がれもしたが賀状の仲でいる

栗石 隆子 (仙台市)

樹から樹へ渡って飢えているカラス
霧の辻にすこし汚れた象を見た
コンクリートの樹海を跳んだロバがいる
狂い咲く花を数えて眠れぬ木
落椿 風はみごとに介錯す

斉藤 はる香 (小樽市)

いまは無名キャベツを刻む指交える
運河散策むかしの玩具埋めました
ちちははよ北の運河の灯を見たか
古井戸のジョーク底が深すぎる
くちびるに享けた罪なら抱きしめん

佐藤 幸子 (札幌市)

雨不足 ふいに旅立つひとが
真向いの家で生まれた赤ん坊
禁断の木の実をいつもありがとう
この人のためにポロポロ歯が欠ける
無口なり 残尿感のあるうちは

挑戦の姿勢

海地大破

正賞受賞のご連絡をいただいて、とうとうやったという思いと長かったという思いが交錯して、とても複雑な気持ちである。審査員の方々も、万年進賞もなんだから、こころへんで正賞を与えてやろうという気持ちが働いたのではないかと恐縮している。

文学コンプレックスにかかっていた少年は、川柳という表現手段を得てどうにか甦ることができた。裏を返せば、精神的・肉体的飢えが今日まで川柳を断続的に継続することができたといえるのではあるまいか。

「準賞の大破」という呼称をいただいていたが、今回で一応終止符を打つことになる。しかし、「準賞の大破」こそ、私の生きざまに最もふさわしい呼称であるので、いつまでたっても挑戦する姿勢を失いたくないと考えている。

どうもありがとうございました。

略歴

- 昭和11年5月22日 森次房吉、玉寿の三男として、福岡県戸畑市(現北九州市)に出生
- 昭和19年 第二次大戦が激しくなり、父母の故郷である高知県高岡郡宇佐町(現土佐市)に疎開
- 昭和29年12月 川柳を知り入江川柳会に人会、高知新聞柳壇・帆傘へ投句をはじめ。その後、「川柳入江」「川柳土佐」「職場川柳」を編集発行。
- 昭和40年 ふあうすと同人、帆傘同人(49年脱退)
- 昭和42年 いづみの会創立立会員
- 昭和47年 四季の会創立立会員
- 昭和50年 展望創立立会員
- 昭和54年 木馬ぐるーぷ創立立会員
- 昭和58年〜61年 Z賞準賞(4回)
- 昭和60年 川上三太郎賞準賞、準とく吟賞
- 昭和61年 冬書賞準賞
- 師系 西森青雨、田中好啓

情野千里 (姫路市)

紫に縛つても哭く昼の蛇
花津波 心とからだ離れるよ
波を越すために胎児の姿勢とる
少年色の幻寒い手に受ける
名乗り出た異母弟の指に水かき

末松 仙太郎 (福岡市)

鯉のぼりどれも上手に風を梳む
清潔な天たと新春の風が言つ
新春の神のジョークに会うみくじ
切手貼る二月の空へ鳩翔ばそ
鎮魂の絵巻展げる軍歌祭

土橋 はるお (鳥取県)

ライバルの掌の中に歩が一つある
掌をかざすと 牡丹雪になる
北風がおしえてくれたのも 涙
太陽に負けずに起きる 妻がいる
欠点を突くと 拳がはね返る

田沢 恒坊 (青森市)

人間は脱ぎ捨てられぬ乱れ籠
数異妙妊婦の膝に置いてある
種子ひとつこぼれて北の野を満たす
一本の画鋏となって天を向く
振り出しに戻るジョーカーかも知れず

本田 南柳 (宮崎市)

風の街ひとを制することもある
鏡のなかのわたし悪友だと思つ
男が狂うおんなが狂う皿と鬮と
ある誤算のせて行くのは霊柩車
風もいろいろ石もいろいろ旅をいく

松村 育子 (大宮市)

ポット沸き立てされば今昔物語
かなしみは母の胎内出でしより
望ましい終着駅が見えて来る
不意に尿意鍋で蜷が喋り出す
皺寄せは女にばかり冬の坂

吉田 浪 (岡山市)

風に髪ほどいて風に抱かれん
花ひらくときの震えをみましたか
赤いばら崩れてからは風の妻
逢いにくるおとこ海図をふところに
如月の闇を出られぬもつれ髪

三浦 玲子 (釧路市)

手離せぬ十指に触れる紙の呼吸
雪の夜へ招かれそつな櫛をさし
われは蛇夜叉と噂の汽車にのる
火をのぞく嘆き疲れた雪おんな
春時雨宿るあなたの日鼻立ち

詩と川柳の中間地帯

柴田 午朗

新聞に折込まれた衣料や家具の写真を満載
したスーパーの広告を、さて何処の店かと探
したが、商店名が何処にも書いてなかった。

四月三日米海兵隊の戦闘機から、ミサイル
が中国山脈へ落ちた。このミサイルは長さ三
・六六米、直経二センチ、重さ二百キロ、
爆薬量四十キロという大きなものだが、警察
などでいくら探してもみつからないという。
(その内何処かに潜っているだろう)

こんな滑稽とも見える事件の続発する今の
世相を、現代川柳はどんな風に提えているも
のか、などと考えながら、この度送られて来
た作品群をていねいに読んだ。

現代川柳は「詩」でなくてはならぬといふ
結構である。しかし「詩」の方では「十人の
人に読まれる詩より、一人の人が千遍読みか
えず詩を」という言葉があるそつだが、現代
川柳では通用し難いだらう。

一方川柳はあくまでその伝統を守るべきで

ある。諷刺や穿ちのない川柳は本ものでない
という考え方が、執拗に守られていることも
事実である。

この両方の考え方を、どんなにうまく処理
するかが、現代川柳作家の直面する大きな問
題の一つであらう。

俳句の方では、川柳以上にいわゆる新興俳
句の分野が広がっているけれども、然し俳句
でも、川柳が古川柳の伝統を守れというのと
同じく、芭蕉の美学を目標とする説が今日な
お強い。

だから「詩」の方では、こうした文芸を二
種のエピグラム(警句)に過ぎぬといひ、俳
句の第三芸術論などの生れて来たのも、ここ
らあたりにも原因の一つがあるように思われ
る。

この度私の手許に送られて来たのは、第一
次予選を通過した四十五名の作品であったが
はつきりは分らないけれども、作者の大部分

山本 桜子 (半田市)

奈落まで男の爪を切りにくく
よされよされと雪に身を灼く雪女郎
抱きよせて雪の白さを何と誇る
火傷する火を懐に物狂い
ひどく疲れて歩く落日ポプラ並木

宮本 めぐみ (仙豆市)

一生涯兵士で重い傘を持つ
青い鳥見たかも知れぬ埴輪の目
平凡な海で鬮魚を飼育する
深海魚浮上せぬまま夏が逝く
軽いタッチで私を切りに来る男

森崎 大青 (姫路市)

十人に電話かけても春は留守
私が入ると君が出てゆく方舟よ
放蕩や六時に寺の鐘が鳴る
壁ひとつ壊せば浄土近くなる
素足でいよう風も曇も青ければ

かもしか川柳文庫Z賞作家シリーズ

- ・第五回記念として刊行中
- ・大賞受賞作品を含む二五〇句掲載
- ・ご希望の方は、刊行会(封筒下段)に
お申しこみください。

が、この「詩」と「伝統」の間にはさまれて
悩んでいるのではあるまいかと想像した。中
には単に頭に浮んだ川柳的な、或は詩的な句
語を綴りあわせた、というような初歩的な作
品もないではなかったが、現代の大部分の川
柳作家は、極端な考え方の人は別として、右
すべきか左すべきかが、朝に夕に頭の中を往
来しているのではあるまいかと思つた。

このことは誠に結構である。こうして五年
経ち十年経ち、ある時には老人作家が多くな
り、ある時には女性作家が多くなり、時には
また若者の中に川柳愛好者が増えたりして、
少しづつ川柳の様相は変化してゆくであらう。
そして川柳の詩情(ポエジー)と伝統の諸要
素が調和して、一つの安定した川柳の領域の
確立されることを私は信じている。

規定に従って、優秀作家五氏を選んだけれ
ども、その選出基準には、私という一個人の
「好みの傾向」ともいいうべきものが、強く作
用していることをお許し願いたい。

- 第一席 金山 英子 第四席 樋口 仁
- 第二席 佐藤 岳俊 第五席 石川 重尾
- 第三席 海地 大破

衝撃を求めて

時実新子

いつからどうして父母は「うちちは」に
なったのだろう。そうして樹はしっかりと父に
定着してしまった。なぜなのだろう。

Z賞第〇回ところが記入してなくて、私
の記憶もあいまいだが、新しい衝撃を求める
思は年ごとに強くなる。激しい感動を与え
てくれる激しい刺激!

作者の個性が年ごとに豹変するわけがなく、
その不動のマンネリズムこそが個性であるの
だが、大方の作者が共有するマンネリズムは
個性とは言いかねる。このよとんだ水の色を
突き抜ける抜き手の泳者を、私は来年もまた
待つことになるのだろうか。

一席 西条真紀作品

いのちとぞ わが錠剤のおびただし
千丈を越えてわが声沙汰がなし
祈らばや わが胸中の沼にこる
あかつきに遊ばす終のこもこもを

わが道は定まりたりし 雪の傘
もつおわかりのように「わが——」の連打
である。自「愛の権化ともいうべき西条真紀
に、いっそ斬新さを見たのは、前述の理由に
よる。

二席 神谷三八朗作品

次のゴミの日に出す一枚のハガキ
留守居して焚火の絵など描いてみる
曇天の朝朝刊をべらべら

たいていの作留群が後半に力が抜けてくる
中で、さすがの遠泳巧者ぶり。退屈させない、
おもしろいという讃辞を川柳界はもっと考え
てもよいと思う。

三席 藤川良子作品

逝く枕生きる枕も蕎麦まくら
無明かな頭上いちめん竹の花
くるものはくる大根を抜いている

つらぬくおもいを

細川不凍

一次選を通過した45名の精鋭たちの一三五

〇句を前に、僕自身 第一回のZ賞に応募し
たときの熱い思いが甦った。選も自ずと熱が
入った。一句一句の優秀は勿論のこと、三十
句全体を貫く作者の思いが目的意識に、特に
注目して選をすすめた。

そして、その結果は、

第一席 野沢省悟作品

・わが顔が映るみそ汁 難破船
・妻のうなじに忽然と咲く水の駅

言葉の駆使や幹旋に意欲的な野沢省悟の作
品からは、自己の世界を拡げていこうとする
創作の姿勢(目的意識)が、ほかの作家の誰
よりも強く看取された。また、自己に向ける
観照の厳しさは、作家としてのしたたかさを
窺わせてくれた。作品の内には、有情の情と
いふべきものが漂っていて、清新なリリシズ
ムで一貫しているのも佳かった。

第二席 桑野暁子作品

・粉ふき手の湯気如月のホヘミアン

・どじょっこふなっこ運命線もなじんでくる
自在に自己の句風を押しすすめてゆく柔軟
性と、現代川柳の多様性と可能性に立脚した
暁子作品である。女性作家特有の情念追求型
の作品と違って、民話的ともメルヘン的とも
つかない一種不可思議な詩情の点出が見られ
る。虚と実、抽象と具象の境界を往き来しな
がら、変幻の光を放つユニークな言語世界を
詩的醸成させているのが魅力だ。

第三席 金山英子作品

・雪ははらはら はらはらと我子なり
・傘はくるりと憎み返して母なる血

金山英子は、自己の境涯の痛みを物静かに
書く作家であるが、応募作品には志の烈しさ
も垣間見え、自分を曝け出す勁さを身につけ
たようだ。対句の多用が若干気にはなつたが、
作品の内側に深く沁み透る心情があつて、翳
りを帯びた湿り気のある抒情は僕の心を捉え

「ノラにもならず」一句のひっかかりは大し
たことではない。(真紀作品にも「訪ね来よ」
あり)——三十句に一貫する良子さんの白色
レグホンのごとき強靱ないのちに乾杯。

四席 中原諷人作品

生いたちの記から水しぶきがあがる
折り鶴千羽 のどかな箸の音がする
たまたま所属(川柳塔)とあって、なつと
くするところがあつた。スローガンや説教の
一歩手前よく踏みとどまった穿ちがみごと。

五席 工藤寿久作品

地唄舞 喉まで雪を詰まらせて
乳房持つ銀杏の下は去り難し

重厚な北の作家たちの中にあつて、この人
の作品は一味ちがう重みと厚みを見せてくれ
る。一途一心は美しいけれど、ゆとりを忘れ
たとき「うた」はいのちさえ細くする。雪の
ただなかに花吹雪を許容する心こそが川柳で
ある。

森崎大責、岩崎真里子、佐藤岳俊、嘉瀬信
柳詩、海地大破、十橋はるお、宮本めぐみの
諸氏にたくさん〇をつけた。ありがとう。

ではなさなかつた。母としての思いが、かな
しくも美しく韻いてきた。

第四席 長町一咲作品

・生きた死にべた巡礼唄が通り過ぐ
・天に唾地に唾イワンの馬鹿より馬鹿

一咲作品には独自の句風の樹立がある。ど
ことなくギクシャクした表現の中に、男の不
器用で一本気な生が、真実という光に伴なわ
れて清冽に貫かれている。そして、人間性豊
かな一句一句の底には、生死流転の仏性が滯
ることなく流れているように思えた。

第五席 岩崎真里子作品

・さびしさの一碗ほどを大にやる
・デザートにほどよい悪が欲しくなる

才気煥発、軽妙洒脱の真里子作品である。
発想の基盤を日常性に置きながら、台所臭さ
が残らないのがいい。表現が歯切れがよく、
さわやかなのだ。機智や意外性の発見など、
男性作家顔負けのエネルギーが感じられ
る。伝統川柳の良さを身につけている人だ。

他に、海地大破、藤川良子、森崎大責、佐
藤岳俊、西条真紀、武村一美、浜本美奈、吉
田州花、斎藤はる香、菊地俊太郎、北村泰章
の諸氏の作品が、深い印象を与えてくれた。

Z賞選后感

山村 祐

Z賞のように一人の作品三〇句をまとめて読むと、作者の個性、作風などの特異性がかなり明らかに迫ってくる。以前にも述べたが川柳句会のはほとんどが題詠個人選で、一句一句の断片的な点取り主義なので、野沢省悟氏なども言及されたように、そこからは川柳の未来図は生れてこない。

現代川柳は新興川柳による心象描写の導入と、プロレタリア川柳の社会的関心への実践を経験して今日に至っている。従って自分を見詰め自分への批評眼を掘下げ、その眼を透して社会的事象に及べば自ら正しい社会性も生れるであろう。人間は集団生活を営み、独りでは生きられぬのだから、日々の生活感情のなから社会性も自然な姿で滲み出てくる。時代と文学との関連性を正確に見定める批評眼無しではすぐれた川柳は望めない。グチ的ひとりごと川柳や、素材的に社会的事象を扱っただけでは個性的作品は困難である。

川柳の未来図に関しては私は私なりの考えから二つの実験を試みている。(1)若い世代を中心にしたり一行詩運動(『短詩』誌の発行や『抒情文芸』誌の選評など)回俳界との交流と相互研究(柳人の立場を明確に示して『対流』誌や『短詩型文学』誌の発行又は編集)現在では二行詩形研究の『森林の会』と柳人として、俳人古川克巳氏の『短詩形交流会』と『口語俳句協会』へ関係している。しかし私にとっては総て過渡的実践で、その一つ一つが踏石となって、「川柳」という短詩形作品の未来図に有効に作用することを信じているのである。

外国旅行は、その風土から生れた人間の生き方、政治、文化などと日本のそれとの相違に接して、比較する機会を与えられ、客観的な思考力と批評眼が養える。柳人も時には川柳というコップを外から眺めて、その全貌を客観視してみたいかがであろうか。川柳

Z賞選后感

寺尾 俊平

川柳Z賞の選考を終了した。
入賞作品群の短評を申しあげたい。

第一席 海地大破

エネルギーが豊富な作品制作態度に敬意を表するものである。従来みられていた気どりの状態というものが少なくなっただけはなによりである。この上は、作品の中に力強い大破という男のこころを唄いこんでいたできたものである。

第二席 佐藤岳俊

岳俊という作家の臭いのするよい作品群である。従来やや一本調子な面があった作品が今回は彼の思惟のままに表現されたのは好感がもてる。

第三席 藤川良子

彼女の持つ独特の語りは、女のよろこび

とかなしみをたゆとごとく、しかも爽やかに表現している。

第四席 西条真紀

女のこころを羅(うすもの)でまとうようなあわあわしい作品は、読むものの心の中で美しい影絵となろう。

第五席 山本忠次郎

私はこの作家が好きである。表現技巧のみ流れないで忠次郎の本心をみたくものである。

他に、情野千里、長町一咲、桑野昴子、岩崎真里子、行本みなみ、神谷三八朗、吉田浪樋口仁等の作品が一次、二次、三次と残ったが、制限のために選外となってしまった。残念である。

の娯楽性の社会的な存在価値の広さ重さへの認識と共に、一行詩形作品としての質的充実への努力のためにまず柳界の閉鎖性を打破することだ。川柳独自の伝統の再検討から始めて、一人一人の作品群の評価と作家論への試み。川柳という短詩形作品の原理的な理論体系的の確立への努力などが緊急に求められていると思う。

それにしてもこの十数年来の女性作家の抬頭は驚異的だ。今回私がZ賞に推した岩崎真里子さんに関しては『かもしか』誌関係の方ぐらいとしか知らないのだが――

寂しさに生えた牙だね 受け入れる
どしゃぶりにぬれてわたしが好きになる
自分の生活感情を見詰める眼は社会的視野へ関連してゆく。前句の底を流れる愛情の巧みな表現。後句の已を見詰める視野の広さ大さ。三〇句を通じて難しい表現は少く、作者の想いは十分に伝わってくる。作品にムラの少いことも力量の確かさであろう。

縄文時代、東北地方は西日本と較べて人口密度が濃かった。大和朝廷の全国制覇以前のいつ頃か、津軽中心に特異な文化圏の存在を考へる人も居る。歴史の下を流れ続けた文化が、今も流れ続けているのであろうか。
川柳は既に、発想のよさ、表現の巧みさのみ満足する時代は過ぎたようである。各自の持つ思考の振幅の強弱を作品の中で反応させていくことがたいせつな状況下にあるのではなからうかと考へる。

より多くの人たちに、川柳のよさを認識して頂くためには、単に悲憤慷慨する前に、何らかの手段を考へなければならぬ。とにかく、私たちは一步一步その悲願みたくものに前進するほかはない。そのためにも、このZ賞作品群のすべての登場人物たちと手をつながなければと、前進しなければと考へている毎日である。

川柳とともに老いてゆくというのでなく、川柳をともどもに愛するために、おたがいはよりよき戦友であることを確認して生きていきたいと思っている。

杉野 草兵

- 第一席 工藤 寿久(弘前)
- 第二席 海地 大破(土佐)
- 第三席 加藤 かずこ(札幌)
- 第四席 桐越 千絵(北海道)
- 第五席 吉田 州花(青森)

テーマを持った作品

橘 高 薫 風

私は、常に一句独立の観点から選を行つて
いるが、作品が三十句になると、テーマに添
うたのを揃えることで、感銘を深めるようだ。
行本みなみ作品

陽炎に入り重くなる下半身

お雛しがり極が担がれる

猫が来て死の順番を耳打ちする

雪月花黄泉のあかるさ亡妻に訊く

亡妻なのか片足あげて笑うにはとり

川渡る蛇が背負うている過去は

みなで哭き一人で泣いた私の忌

「然るべき顔で一本の葦が死ぬ」の序曲か
ら終曲まで、力みすぎの無駄もあるが、諧謔
を通して重厚だった。終章は、やや演出
が過ぎたので、肝心な箇所が軽くなった。

浜本美茶作品

一族の血のあかるさやさくらんぼ

処女受胎つるりとむける茹玉子

金平糖の中にテロリストが居るよ。

試験管でんでん太鼓欲しくなる

空中ぶらんこへ月の手がのびる

巻頭の句の、作者の持ち味と思える明るさ
が、全体の作品の底に流れているのが良い。

金平糖の爆発物も試験管ペービーも、宇宙衛

星のプランコも、現代の諧謔で、これが作品

を唐突から救っている。

藤川良子作品

逝く枕生きる枕も蕎麦まくら

つつかけでひよいと切り岸まで歩く

くるものはくる大根を抜いている

日月よ弓は袋に収められ
胸奥の桃を咲かせて散らすなり

これら一連の挽歌は抒情に根ざしていて、
私の指回すものに最も即した句柄である。

感銘を深くしたが、表現の中に、例えば「鈴

を淋漓と」とか「蒼大ると」があり、こだ

わりを持った。題の「シングル・セル」は、

単細胞であろうが、これも適切と思えない。

審査は怖い作業である

大 野 風 柳

川柳にもいろいろな賞が設置されるように
なった。よろこばしいことである。

川柳を書いて選者から見えて貰って、その優
劣を選んというものによって知らされ、その
句数の多少によって満足する時代は去ったと
思う。

もちろん表現上の巧拙はあろうけれど、作
者がいったい川柳というものをどう受け止め
何を川柳によって表現しようとしているか。
それが問題なのである。

大会での競吟をすべて否定するものではない
が、入選を競うことがすべてではない。

そうした中で、『川柳Z賞』が設置され、
第五回目を数えた。そして私に審査のチャン
スが与えられた。第一次選考選出者四十五名
の作品がドサッと届けられた。一人三十句で
ある。一句一句の戦いではなく、三十句の戦
いなのである。

第二次選考委員がこれから優秀作家五名を

選び、点数制によって川柳Z賞が決定するこ
とになる。締切り一カ月前にこれらの作品群
を手にしたが、単なる選句と違って三十句が
対象となるとイッキに四十五名の作品を選ば
なければならぬと思った。

他の二次選考委員の方々はどのような選考
法をとったかは判らぬが、果して点数制だけ
で川柳Z賞が決まられていいのかどうか、い
ささか不安を感じたのも事実である。

○ ○

さて、数日間かかって私なりの結果を得た。
一席は小島悦生に決めた。とかくこの種の応
募作品は賞を意識してか、「おもい」よりも
「ことば」が先行するものである。私のとこ
ろでも川上三太郎賞作品を毎年募集している
が、ここでもそうなのである。「ことば」は
手段にしか過ぎないのに「ことば」が目的か
のように錯覚する。とくにZ賞のように三十
句で勝負する場合には、三十句を通しての作

原多佳子作品

木枯しの中で蒐めるわたしの骨

自販機を押すと茫茫たる砂漠

躬のうちの鴉が穴を深くする

影ばかり盗みわたしに影がない

これら一連の作品は、身のうちの虚なる空
間を掴み出している。その空間には何も無い
ことはないと思われる。

榎山へ軍楽隊がやってくる

逃亡へボタンの穴が明いている

などの句で、そう感じたのだ。

林瑞枝作品

一本の葉から産まれ出たふたり

挿鉢を上がるいち厘花はたけ

花冷えや乳房の痛む紐がある

銜して山は孤りにして置かぬ

「叱られる子の右耳がぼとり落ち」一例を
あげると、この句、断定していて渾沌として
いる。感覚を駆使して、凝集力の足りぬ
ところの惜しい作品が多かった。

以上の五氏の作品に次いで、野沢省悟氏や
小島悦生氏の作品に注目したが、今回の選考
は非常に難しかったことを申し上げておく。

家としての川柳理念が貫通していなければい
けないと思う。そうした中で小島悦生作品が
私を攫えたのである。私が攫えたのでなく私
を攫えてくれた。一句一句見れば、着想も表
現にも踏み込み切っていない未完成さが目立
つ。しかし私はむしろそこに魅されたのであ
る。踏み込まない余裕とでもいうのか、一種
のおもしろさがないと思つた。

二席の嘉瀬信柳詩作品は、三十句を通して
ふつと振り向かせてくれる句風、それが本人
のつぶやきとして好感が持てた。

三席の工藤寿久作品は、ときとして力みを
感じさせるものの、思考の掘り下げと表現の
老練さには敬服。

四席の桑野昴子作品はキチンと自己の表現
を擱えていらつしやる。そのゆとりを感じた。

五席の山本忠次郎作品も一貫した川柳観を
感じることができた。ただ表現のことばはに
わずかのマンネリを感じないわけではない。

次点には樋口仁・野沢省悟・行本みなみ作
品が続いた。また惜しかった作家に金山英子
・海地大破・浜本美茶・佐藤岳俊らがいるが
審査の角度を少しでも変えれば、これらの順
位が逆転しかねない。審査は怖い作業である。

「人恋しさ」の花園

— 第五回Z賞・選後私観 —

尾藤三柳

川柳に〇〇の詩などというタガを嵌めることと自体むなしいが、川柳に限らず、広く芸術一般が人間を離れて存在し得ない以上、川柳もまた最終的には人間の詩であることを勝手にやめてしまつというわけにもいくまい。

ところで、第一次詮衡を経た四五作家、一三五〇章の作品とひとわたりの挨拶が済んで実のところ、私は大いに戸惑っている。この戸惑いは、過去四回にもすこしずつはあったが、今回はとりわけて振幅が大きい。

奔流のようなコトバの大群がドツと通り過ぎたあとの、いいがたい空虚と、それに対して何の手だても持たないわが身への苛立ち。行けども行けども人ツ子ひとり出会うことのない旅は、風景が美しければ美しいほど、救いのない深淵を身内にひろげる。

現代作品のこれほどまでの量が、表現用語として依存する文語もしくは文語様式とは、いったい何だろう。

明治四十年代に初めて文語を川柳に採り入れた新傾向の作家たちは、おおむね二十二三

十歳台であったが、かれらはコトバとコトバの新しい関係を発見したよろこびのあまり、自分自身とコトバとのコミュニケーションを見失った。川柳においてコトバが人間を離れた最初の経験だが、これら若い作家群は、この経験を奇貨として、大正・昭和期を背負う代表作家になっていった。三太郎、水府、五葉、半文銭、路郎……いずれもしかり。

それから八十年後の今日、現代川柳の名をもつて呼ばれ、明日を指向すべき作品群に、明治新傾向が犯した同じ人間とコトバの乖離が、以前にもましてうつくしい花園をつくっていることに、私は戸惑ったのである。

こんな動搖のなから、五人の推薦作家を選ぶ仕儀となったが、私を衝き動かしたのは当然ながら「人恋しさ」であった。私のなかの空白をわずかも埋めてくれる作品なら、個体としての小さなキズぐらいいは目をつぶろう。私は、人間が恋しいのだ。

一句一句の完成度を論じれば、もちろん不満が残らないわけではない。が、推薦五氏の作

品風景のなかでは、すくなくとも人間のなまあたたかさに触れ合えた気がする。
原多佳子（静園）さんの日常的な作句活動については知るところがないが、一連の作品から感じ取れたのは、実存としての自己と鏡の中の自己を見分ける力を見えているということ。また資質の域にとどまっていいるが「人間」が書ける女性作家としての可能性は充分と見たい。

菊地俊太郎（東京）氏は、応募作家中での異色である。現代の流行ともいうべきナイーブな情念の世界とは一線を画して、あくまでも乾いた視線で捉えたセルフ・アイロニーと諧謔は、いまやこの作家の武器ともなった口語の力学をもってして初めて成り立ち得るものだ。粗さはむしろ特権と認めてやりたい。

野沢省悟（青森）氏は、マイナスとして指摘すればし得るコトバ相互のきしみを逆手にとり、そのきしみの中から痛みを引き出すとする自己演出をきわどく手法化している。
海地大破（高知）氏は、すでに受賞歴を持つ作家であり、多言を要すまい。
樋口仁（愛知）氏は総体に句会作句的な技術の先行が気になるが、将来性に期待して。

ある選后感

片柳哲郎

Z賞の選考は大変な作業だと毎回思う。さすがに簡単に取捨される作句群ではない。

だが、僕の現代川柳に対する信条は、一句を讀み、一句を語るとき、作者から読者に確かに速かに手渡される酔うような高揚された誘導、誘引のその幻の存在感の有無である。短詩型文学の究極に最後まで残されるのはどう変ろつと日本文学としての抒情性であろうと僕は信じているし、作句化に際して作者の心底に己れに対する怒りが秘められぬ限り短詩型文学にはならぬとさえ考えている。

西条真紀の作品はかなり鑑賞者としての前述の僕のその思考に響鳴してくる。ひとつの言葉より大切に扱い、自分の信じている真実への道の中に、自己疎外にまで追い込まれてはじめてつぶやく一連を僕は確認したと思つた。最も特筆すべきは作品の中に技巧きわまる嫌汚すべき嘘が無いことであつた。読めば読むほど深い視野が拡がってくる量感も認

められた。

武村一美の一連は読み終つて取り捨てねばならぬという一句が特に無いのが不思議に映つた。決して難しい句語、表現を使っている訳でもないが、無技巧の中に一句一句を真剣に相対して創作し続けたまことが輝いていてた。

桑野昴子の持つ斬新な採用句語は、ややもすると重くなる内意を明るく展開する助けとなっている。叙法は時として乱暴に近い放任性を秘めているが常に力感をたたえており、大河口をもっているのが魅力的と言えよう。これは現代の女性作家の中では希有な存在と僕は思うし、未開の分野を包含する作家の一人と思つている。

金山英子の作品群には、病みあがりの月の下の情景が展開されていると思つた。ある意味では異状であり、ある意味では狂気でもあつた。その中に一本の怒りの波が見えがくれし

て真実を誘つ。一、二句ほど消して欲しい句があるが、総じて技をもつて向つてくる氣組みが力感を与えている。

海地大破作品には積木の部屋を常に思わせる。巧みに積木は組み上げられ天に向う。だから足元の一本の支えを叩き脱すと、大音響とともに崩れ砕けるであろうと思つた。しかしそれがこの作家の作品上の特性であろう。

入選の枠には入らなかつたが、工藤寿久作品の持つ野性の渴きを思わせる一連、佐藤岳俊の泥まみれの男の詩、吉田州花の美しいのちの讃歌など特筆に価すると思つた。また興味ある作品ながら余りに誤字が多くて採り上げられなかつた作家がおられた。文章と違つて短詩系は一字、一字がいのちを燃やしている筈である。誤字の中で作品が泣いていた。

最近亡くなられた某現代川柳作家は、「今更現代川柳に美などを考えるのはおかしい」と言われた。然し根底の美を放棄した日本文学に何をもち支えるべきものがあるのか、と僕は思っている。

第六回 川柳Z賞・作品募集あんない

▽作品

自由吟 三十句 十組
未発表、または昭和六十二年既発表の作品に限ります。

▽賞

・大賞 一名 十万円
入賞記念として津軽塗贈呈。

▽用紙

事務局にお申しこみください。
なお勝手ながら、専用紙以外の
出句は拝辞いたします。

受賞作品を含む二五〇句を「かも
しか川柳文庫」より、大賞作家句
集として刊行。五十部を贈呈

☆第一次選考委員

吉田成一 (岩手県)

★第二次選考委員

細川不凍 (北海道)

▽参加費

不要。発表誌希望者は千円。郵券は、五百円2枚、千円1枚。

▽締切り

昭和六十三年一月三十一日消印

▽備考

自薦他薦を問いませんが、他薦の場合は、本人の了解を得てください。応募作品は、お返し致しませんのでご了承ください。

▽送付先

青森県下北郡川内町浦町二九四
高田寄生木方 (〒039-152)
川柳Z賞選考委員会事務局

受賞作家たち

- ①昭和58年 細川不凍 (北海道) 極刑のその日も還るブーメラン ほか
 - ②昭和59年 酒谷愛郷 (伊万里市) 沼からの風がどうにも眠い父 ほか
 - ③昭和60年 古谷恭一 (高知県) 板の間を俯つてくるのは母の髪 ほか
 - ④昭和61年 西山茶花 (岡山市) 叶うなら葡萄の町のピアノ弾き ほか
 - ⑤昭和62年 海地大破 (土佐市) 箸を作らんと一本の樹を削る ほか
- 川柳Z賞選考委員会

北の角笛 79

相馬銀波

企みの小石男の血を枯らす

札束が人の弱味を焙り出す

安楽死願う ろうそくだけ燃える

ブランクが男の目方軽くする

三割の稲田に使う種子がない

桃桜りんごと咲いた解放感

九分九厘信じた猫に裏切られ

発芽した我が採園に飛びあがる

タンポポをライバルに咲くチューリップ

飯の粒まだ残さない父母の粥

花つれづれに⑤

セイタカアワダチ草 吉田 州花
花粉が飛んで洗濯物が汚れるとか、花粉病の原因とかいわれるこの花を、オオアワダチ草のことだと思い込んでしまった私は、庭に群生して見事な黄を見せるこの花を根こそぎ抜いてしまった。

南の方へ旅行することが何度かあり、線路わきの荒地に凄まじい勢いで広がっている、一面の黄が、本当のセイタカアワダチ草だと知ったのは何年か後のことである。原産地では、花粉病の原因とはされていないそうだが、張りめぐらした地下茎が他の植物の生長をpushする毒成分を出すらしく、外来だから原産地にある病害虫や競争者もなく、どんどん広がって行くのは、セイタカアワダチ草もオオアワダチ草も同じらしい。

我家にこの花がなくなってから、突然向いの空地が増えだした。花嫌いの誰かが嫌で夏のはじめに刈り取ってしまったのだが、勢いの良いアワダチ草は根本から茎をのばし始め、秋には芒、つゆくさと連れ添い見事なコントラストを見せる。